白百合女子大学ニュース
リスブラン
第 150 号
Le Lys Blanc

✣学長ごあいさつ✣

変わる白百合／変わらない白百合

白百合女子大学
学長 **猪狩　友一**

2024 年 6 月 1 日付で学長に就任した猪狩友一（いかり・ともかず）です。よろしくお願いいたします。国語国文学科の教員として 30 年以上勤めて参りましたが、この間、大学にもシャルトル聖パウロ修道女会のマ・スール（修道女）方にも大変お世話になってきました。昨年度まで 4 年間、これまでの感謝の気持ちで文学部長を務めてきましたが、思いがけず今度は学長を拝命することになりました。まだ感謝の表し方が足りない、とマ・スール方に言われているような気もします。

学長になることを息子に告げたとき、「おめでとうと言いたいけど…」と言われました。他にも何人もの方々から、同じことを言われたものです。確かに現今本学の置かれている状況を鑑みれば、そう言われてしまうのもムベなるかなと思います。しかし、本人はそう悲観してはいません。ピンチはチャンス、夜の闇が深いほどその先に光明が見えてくる、そんな気がしています。

学長として掲げようとしているコンセプトは「変わる白百合／変わらない白百合」です。変わる白百合とは、時代や社会の変化に応じて、たゆみなく自らを更新し続けること、そして、変わらない白百合とは、どんな時代にあっても、自らの根本にある良さを保ち続けるということです。ある意味、当たり前のことですが、これからの本学を導くために、とても大切なことだと思っています。

先日ある人（学外の）から、「白百合の良さって何ですか？」と尋ねられました。とっさに思い出したのは、第 2 代学長の故片岡照子マ・スールのことです。私が本学に勤め始めたとき、学長だったのは片岡マ・スールでした。私は喘息の持病があり、勤めて間もなく早速病気が悪化して入院してしまいました（現在は良い治療薬がありますが、当時はよく発作を起こしていました）。退院後復帰した教授会で真っ先に私のところに来て、大丈夫ですかと声をかけてくださったのは片岡学長でした。まだ着任したばかりの若造にも真摯に心をかけてくださったことをよく憶えています。

本学の教育目標には「人間一人ひとりをかけがえのない存在として大切に思い、自ら進んで他者に仕え、社会に貢献しようとする心の育成」ということがあります。マ・スール方は自らその精神を体現していたのでした。片岡マ・スールには足元にも及びませんが、学長として少しでも近づきたいと思っております。現在、キャンパスでマ・スール方のお姿を見ることはできなくなりましたが、彼女たちが遺した“白百合のこころ”は、これからも変わらず受け継がれていくはずです。

2024年
7月10日発行

Contents

変わる白百合／
変わらない白百合
学長 猪狩友一 ……1
ごあいさつ
新副学長……1
新文学研究科長……2
新文学部長……2
新任教員……2～3
人事……3
サバティカル報告……3～4
定年退職教員あいさつ……5
トピックス……6～7
キャリア・その他……8

✣ 新副学長ごあいさつ ✣

文学部フランス語フランス文学科　教授
副学長　**善本　孝**

白百合らしい変革を求めて

みなさん、こんにちは。6 月から副学長を務めます善本孝です。専門はフランス語教育、フランス 20 世紀文学そしてコミュニケーション論です。現在、教務・研究担当の副学長として、まず国・フ・英 3 学科の先生方と協力して、文学部のカリキュラムの見直しに取り組んでいます。

近年大学を取り巻く状況がたいへん厳しいのはみなさんご存知のとおりです。現在進めている文学部のカリキュラムの見直しも白百合女子大学の学びをもっと魅力的なものにし、より多くの人に支持してもらうための改革です。白百合女子大学の教育が大切にしてきたものを守りつつ、時代にあった大学としてどのような改革を進めるべきか、大学運営の一角を担うことになった立場として重い責任を感じています。

一人ひとりの学生を大切にする教育、学生がのびのびと安心して学べる環境、留学など思い切って一歩踏み出そうとする学生の背中を押すサポート、そうした穏やかでかつ知的な刺激に満ちた大学生活こそが白百合のよさだと考えています。この白百合らしさが失われてしまう改革では、たとえ大学として生き残ったとしても、それはもはや白百合女子大学ではなくなってしまうでしょう。

教職員だけでなく、在学生、卒業生をはじめ白百合女子大学を愛するすべてのみなさんと力をあわせ、知恵を出し合ってこの危機の時代を乗り越えたいと思います。みなさんのご協力をどうぞよろしくお願いします。

❊ 新文学研究科長ごあいさつ ❊

文学部フランス語フランス文学科　教授

文学研究科長　**海老根　龍介**

多様化の時代の大学院

2024年度より大学院の文学研究科長を務めることになりました、海老根龍介です。2020年度から2021年度にかけてこの職をつとめ、このたび2年ぶりの復帰になります。

2020年度の就任あいさつで私は次のように書きました。「大学院での「研究」は、自分のためだけのものではなく、自分が関わることでその学問領域に何らかの貢献をすることが求められます。そのための訓練は一人で、また一朝一夕にできるものではなく、教員による導きが不可欠です。しかし学問の世界では、正しい現状認識と手続きを踏まえさえすれば、誰が何を主張するのも自由であり、たとえば指導教員の説を学問的に批判する権利はつねに保障されなくてはなりません。学生を「研究者」へと育てること（大学院生全員を職業としての「研究者」にするという意味ではありません）と、対等な「研究者」としての学生の発信を促し尊重すること、この二つの機能をバランスよく両立させるのが大切です。」この考え方は今も基本的には変わっていません。

一方で大学院の機能がますます多様化しているのもたしかです。修了後のキャリア形成につながる学びを求める学生は増加していますし、社会人の学び直しの場としても期待の高まりを感じます。いま必要なのは大学院の学びから、「研究」の要素を薄めることではなく、社会における「研究」の意義を再構築することなのでしょう。

白百合女子大学大学院が学生たちによき環境を提供できるよう、精一杯の努力をしたいと考えています。よろしくお願いいたします。

❊ 新文学部長ごあいさつ ❊

文学部フランス語フランス文学科　教授

文学部長　**越　森彦**

より賢い共同体でいられるように

フランス語フランス文学科の専任講師として本学に着任したのは2008年のことでした。以来、教授会で発言したことは一度もありませんでした。本来私はたいへん内向的な性格をしておりまして、そのような自分がなぜ選ばれたのか。いまだに分からず、戸惑いは消えていません。ただ、任務を引き受けた以上は、―健康を害さない範囲ではありますが―、私たちがより賢い共同体でいられるよう尽力します。賢くあること、スマートであること。これからの文学部には、それが必要です。パウロはいみじくも述べています。「物の判断については子供となってはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください。」（「コリントの信徒への手紙一」14・20）パウロの言う「子供」とは、「子供っぽい大人」のことでしょう。いくら努力しても、その目標そのものが誤っていれば、自滅の道をひた走るだけです。できないことはできないと認め、望ましくないことでも仕方のない場合は受け入れる勇気をもっている。その上で活路を見出す。それがパウロの言う「大人」なのではないでしょうか。厳しい現実が待ち受けていますので、ちゃんとした「大人」の判断ができる学部長になりたいです。これからは教授会でも発言するつもりです。どうぞよろしくお願いします。

新任教員ごあいさつ

基礎教育センター

教授　**大塚　秀治**

「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」認定校にふさわしい情報教育環境の実現を

情報教育、情報ネットワークが専門の大塚秀治と申します。前任校は麗澤大学経済学部で情報関連のセンター運営などにも携わっておりました。夢のリタイア生活を満喫する予定で早期退職したのですが、ご縁で2022年度より非常勤として情報科目を担当することになりました。さらに、今年度より基礎教育センターの特任教授となりました。さて、周知の通り本学は、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」認定を受けております。その申請のためにデータサイエンスを中心として情報関係のカリキュラムが全面的に更新されました。ここ数年で、その新カリキュラムの成果が徐々に出始めており、担当者のカリキュラム改編の苦労は報われつつあると感じます。新しいカリキュラムを実践する身としても嬉しい限りです。しかし現状は、この認定を維持するため、整備されたカリキュラム以外の部分、とりわけ設備面、制度面の継続した改善が望まれるところとなっています。私も、学生、保護者も含めた本学ステークホルダー全体にとってよりよい教育環境が実現されるよう微力ではありますが貢献したいと考えております。ということで、残念ながら私個人の夢のリタイア生活は数年延期となっております。

文学部英語英文学科

准教授　**島﨑　里子**

研究者として、教員として

このたび文学部英語英文学科に着任いたしました島﨑里子と申します。ことばとコミュニケーションに関する科目を担当いたします。伝統ある白百合女子大学の一員として、未来を担う女性たちの教育に携わる機会を与えて頂いたことに深く感謝申し上げます。

私の専門は英語学です。所謂、コミュニケーション・ツールとしての英語ではなく、英語という言語そのものを対象に、その発達の歴史を研究しています。最近10年程は、特に初期中世（11世紀から13世紀頃）の英語で書かれた聖女伝を中心とする宗教散文を扱っています。印刷術が発明される以前ですので、手書きの写本を読み解くところから始めます。

当時のテクストは、当初はラテン語でしたが、時代が下るにつれて英語に翻訳されるようになり、次第に英語で書かれるようになります。その過程で、元のテクストはイギリスの土着の文化を取り込んで徐々に形を変え、独自の作品へと変容していきます。そのような変化の過程における言語使用の分析を通して、当時の社会や人々の思想に迫ろうとしています。

時代も場所も遠く離れた異文化の世界に思いを馳せ、答えのない問題を考え続け、問い続ける研究者として、同時に、学生たちと語り合い、共に学び合う教員として、日々精進して参りたいと存じます。どうかよろしくお願いいたします。

人間総合学部児童文化学科
准教授　山中　智省

「好き」を起点とする主体的な学びに向けて

今年度より、人間総合学部児童文化学科に着任いたしました山中智省と申します。日本の近現代文学やサブカルチャーを専門としており、これまでは主に、若年層向けの娯楽小説として知られるライトノベルを対象として、現代日本の活字コンテンツとその周辺動向をめぐる文化研究に取り組んできました。本学では、日本の児童文学史に関する科目に加えて、基礎演習や卒業論文などを担当させて頂いております。

本学への着任前は共学の短大や大学において、女子学生の割合がかなり高い学科に所属しながら、個々の学生の実態に見合った教育の実践に努めてきました。女子大学での勤務は白百合女子大学が初めてとなりますが、今後とも学生の皆さん一人一人に寄り添った上で、本学らしい丁寧できめ細やかな学びを提供していけるよう、日々精進して参りたく存じます。

また、児童文化学科の特色である「好きをきっかけに探って、考えてみる」という学びは、まさに私が学生の頃、学問探究の魅力に気づくきっかけとなったもので、進路等を考える際にも大いに役立ったものでした。そうした自身の経験も念頭に置きつつ、私は本学において、学生の皆さんが「好き」を起点に主体的に学び、将来に繋がる知見や意欲を得られるよう、精一杯サポートしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

人事

【専任教育職員／専任事務職員　退職】

吉成　啓子	基礎教育センター　教授
室城　秀之	文学部国語国文学科　教授
宮本　祐規子	文学部国語国文学科　准教授
二村　淳子	文学部フランス語フランス文学科　准教授
島田　由香	文学部英語英文学科　教授
木原　健次	文学部英語英文学科　准教授
北野　温子	教務部教務課

【専任教育職員／専任事務職員　昇任】

川瀬　卓	文学部国語国文学科　教授
武田　加奈子	文学部国語国文学科　教授
波多江　洋介	人間総合学部発達心理学科　教授
ｼｮﾝｿﾝ ｴｲﾄﾞﾘｴﾝ ﾚﾈｰ	文学部英語英文学科　准教授
菊地　浩平	人間総合学部児童文化学科　准教授
杜　純江	プログラム支援センター　主任代理

【専任事務職員　任用】

青木　俊輔	教務部教務課　課長
石川　尚子	総務部
小川　美紗子	入試広報部入試広報課

サバティカル報告

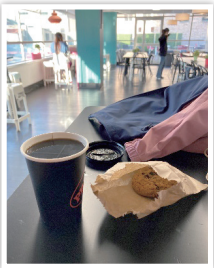
Sydney Harbourで「愛」について考える

文学部国語国文学科
教授　武田　加奈子

普段の生活の中で自分が「日本人」だと意識することはあまりないですが、外に出れば嫌でも「日本人」にさせられます。今回の機会を利用していろいろな国に滞在しましたが、その中でも一番刺激的で楽しかったシドニーでの疑似留学体験からひとつご報告します。

シドニーでは（この年齢で）ホームステイも経験しました。港近くを散歩していた時、ホストファミリーの男性が「ちょっとディスカッションしよう」と吹っ掛けてきたことがありました。（すでに私の気持ちはケンカ腰。）

彼の主張は、日本人はなぜI love youと言わないのか／カナコも娘たちを愛しているなら言うべきだ、というものです。私の使用語彙に「好き」はあっても「愛」はなかったので、「急に私がI love youって言ったら娘たちは私がおかしくなったと思う」と反論しましたが聞く耳もたず…。私の個人的なことはさておき…話しながら彼の言い分を分析していて、彼のI love you使用例のほとんどが日本語の「愛してる」とは機能が違うと気づきました。彼を納得させることができない自分の英語力にもどかしさを感じながらも、まあ、この点に気づいたことも収穫の一つだと満足することにし、隣であれこれうるさいおっさんの主張を適当にやりすごしながら夜の街を歩いていました。



▲ブラックコーヒー
ブラックコーヒーの注文方法が違うということを店に行って初めて知り、戸惑いました。

些細なことではありますが、何十年かぶりで自分や自分の言語行動を見つめ直す、いい機会を頂戴できたことに感謝しております。

ベルナノスの聖なる機械を求めて…

文学部フランス語フランス文学科
准教授　ブルネ トリスタン アンリ

私はこの一年間に数年前から計画していた研究に取り組むことができました。その研究の中心にあるのは、幼い時に私の想像を掴んだ日本アニメの中心にあった「巨大ロボット」のフィギュアです。フランスで大ヒットした作品「UFOロボグレンダイザー」から日本アニメの代表作になっている「機動戦士ガンダム」まで、そのフィギュアは日本のサブカルチャーにおける独特のシンボルになったと言えるでしょう。そのフィギュアは間違いなく、日本の高度経済成長とその成長の基礎と原動力に支えられた技術的な進歩によって生まれたものです。研究の目的は、その独特のフィギュアである（パイロットによって操縦される）「巨大ロボット」は、どんな技術のイメージを反映し、又は技術的な進歩をどういう風にイメージするのか、という問いを中心にしました。その研究の中で、私が出会ったのは、20世紀前半のフランス人カトリック教徒の小説家ジョルジュ・ベルナノスでした。ベルナノスのエッセー「フランス対ロボット」を中心に、彼の「機械の文明」の批判に出てくる「巨大ロボット」の隠喩をどういう風に位置づけるべきなのかを追求する論文を書くことにしました。ベルナノスの宗教的で美学的で政治的な批判のもと、その裏にぼんやりと浮かび上がる「聖なる機械」は、現代社会が生み出す奴隷ではなく、英雄としての「巨大ロボット」のイメージととらえることができるのではないかと考えています。

◀オルセー美術館にて

400年前に日本にやってきた英国人の足跡をたどる

文学部英語英文学科
教授　ナイト ティモシィ

コンピュータの前で勉強したり、図書館で資料を調べたり、日本に最初に来たイギリス人、ウィリアム・アダムスにゆかりのある場所など、さまざまな史跡を巡るために、たくさん歩き回った。彼は三浦按針として知られ、ジェームズ・クラベルの小説『将軍』でフィクション化されている。私は、1600年にオランダ船デ・リーフデ号の航海士として彼が最初に上陸した大分県の浜辺を訪ねた。そのビーチを訪ねた時の様子はこちらでご覧いただけます：https://youtu.be/0XvAnWqFpXQ

その他にも、日本のアダムスゆかりの地や、彼の故郷であるイギリスを歩いた。ケント州のジリンガムにある彼を記念するモニュメントは、1930年代にイギリスと日本のファンによって建てられた（写真）。彼が洗礼を受けた教会（同じ書体が残っている）や、メドウェイ公文書館でもさまざまな文献を調査した。

ロンドンの大英図書館では、17世紀初頭にイギリス東インド会社のために働いていたアダムスをはじめとするイギリス人貿易商が日本から送ったさまざまな手紙を調べた。

また、言語教育・学習の最新動向、特にAI周辺の知識構築にも時間を費やした。

私の関心のもうひとつは、会話がどのように機能するかということである。私は、数年前に留学したテンプル大学ジャパンにおいて行われた教師および言語学習者のための会話分析の再教育コースを受講した。

◀イギリス・ジリンガムにある三浦按針の記念碑の隣

世界のSEL（Social and emotional learning）から
～社会性と情動の学習を研究発展につなげる1年間～

人間総合学部発達心理学科
准教授　眞榮城　和美

サバティカル期間中は、日々、大学研究室に通い、研究活動に邁進させていただきました。2023年9月に本学で開催された日本子ども学会第19回大会「“子ども期のしあわせを考える”～社会のなかでの子どものクオリティ・オブ・ライフ～」（大会長：菅原ますみ先生）に宮下孝広先生とともに事務局メンバーの一人として関わらせていただいたこともサバティカル中の収穫の一つです。また、年間を通して、Social and Emotional Learning（以下SELと表記）、日本語では“社会性と情動の学習”と表現される活動に従事することができました。5月には、SELをベースとした「りすぶらん・あんふぁん−子育て支援カフェ−」を学生たちと一緒に開催。8月にはシンガポール、3月にはアメリカにてSEL関連の視察・学習の機会を得ることが叶いました（シンガポール視察をご一緒させていただいた目良秋子先生にも改めて御礼申し上げます）。特に、アメリカでの国際コンソーシアムには、10か国（米国・英国・メキシコ・ブラジル・チリ・スロバキア・リトアニア・トルコ・中国・日本）のメンバーから、各国のSELの実態と成果が語られ、非常に刺激的な時間を過ごしてきました。この1年間の学びをこれからの教育・研究活動に還元して参ります。本当にありがとうございました。

※ここでは語り切れないことを、2024年度の学園祭期間中に開催される発達心理学科ホームカミングデーにて発表させていただく予定です。

▲Committee for children 国際コンソーシアム2024の様子

シンガポールのパッションに影響されて

人間総合学部初等教育学科
教授　目良　秋子

初等教育学科の開設が2016年、それからは保育者養成教育に没頭した年月でした。そのようななか、自身の保育者養成を振り返り、また変わりゆく現場に求められる保育者とは何かを見つめ直す機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

日本では今なお少子化傾向に歯止めがかからないなか、さまざまな方面から子育ち・子育て支援の充実が図られています。その社会的役割を保育現場の保育者も担っており、家庭を支援する力も保育者には求められています。子どもの健やかな成長のために、地域や園の保育者等と家庭が連携して共に地域の子どもを育てていくようになりました。その連携の効果的なあり方について、より深く学びたいと思っていたところ、シンガポールの発達に課題をもつ乳幼児への早期介入発達支援ECHOフレームワークを知り、現地の支援センターの視察と研修を受けることでその実際を学ぶことができました。視察したTHK EIPIC（Thye Hua Kwan）では、2歳から就学前の幼児を対象とし、知識や技能の習得と日常生活場面に直結するようにそれらを活用できるよう（Holistic）、“自分の力で生きる”ことができるよう発達支援を行うとともに、保護者が家庭でも専門家と同じようにかかわることができるように支援を行っています。ですが、一方的な親支援ではなく、保護者がどのようにわが子を育てたいと思っているか、保護者の考えを尊重する姿勢は保ちます。

今回、保護者や地域と一体となって子どもの療育に携わっているセンターのほか、保育の質向上に資するプログラムを実践している園として認証を受けている保育所や、有能な保育者として認定された先生が在籍しSTEM保育を実践している幼稚園、カトリック系の小学校での社会情動的スキルの授業等を見学しました。「人は国の宝」と宣言しているシンガポールだけあり、滞在中は終始子どもたちの教育へのパッションに圧倒されましたが、日本も負けてはいられないと思った研修でした。

※Early Childhood Holistic Outcomes（ECHO）

▲THK EIPIC（Thye Hua Kwan）での研修風景　眞榮城和美先生と参加

定年退職教員あいさつ

名誉教授　室城　秀之

スールが大勢いらっしゃったころ

私が白百合女子大学に勤めた40年前、大勢のスール（シスター）が学内にいらっしゃいました。ベールをかぶった方々を人生で初めて身近にして、とまどいもありました。

学長はもちろん、事務局長も、また課長もすべてスールで、各学科（勤めた時は、国仏英の3学科でした）にもアドバイザーとしてお2人のスールがいらっしゃいました。お2人で学科の400人超の学生を担当してくださるのですから、たいへんだったろうと思います。それも、1人ひとりの学生をじつによく把握していらっしゃる。頭が下がる思いがしました。

国文学科（当時）のスールはSr福井とSr大島で、Sr福井は学科の教員でもありましたから、特に親しくしていただきました。母を知らない私にとって、もし私にお母さんがいたらSr福井のような方なのかなと、ひそかに慕っていました。

子どもが生まれました、初めて歩きました、幼稚園に入りました、小学生になりました、病気に罹りましたなどとご報告すると、Sr福井も、一緒に祝ってくださり心配してくださいました。また、ほかのスール方がたも、おめでとうございます、ご心配ですねのように声をかけてくださるのです。‘家庭的’という白百合の雰囲気はこのようなところからくるのだなと思いました。

現在、学内にスールはいらっしゃいません。それが残念でなりません。今では望むべくもありませんが、私を、そして、多くの教職員、学生たちを温かく包んでくれていたよき白百合を残して伝えてくださればと願っています。

名誉教授　吉成　啓子

健やかな学生の育成を目指して

白百合には体育の教員として、1987年（昭和62年）からお世話になっています。最初は非常勤でしたが、2年後（平成元年）に専任になりました。当時、世の中はバブルの真最中で、体育館フロアー奥の体重計に毛皮のコートが無造作にぶら下がっていたことを思い出します。その頃体育は必修でしたが、1991年の大学設置基準の大綱化により多くの大学が選択に切り替え、本学も選択になりました。選択になって良かったのは、体育に対するモチベーションの高い学生が集まるようになったという点です。必修でなくても体育を履修する学生は、もともと身体を動かすことが好きなんですね。

しかし一方で、運動があまり好きでない学生が体育を敬遠するようになりました。これは、健康維持の必要性を認識・実感することなく卒業していく学生が増える、ということを意味します。実際、学生の体力は年々低下しているという報告が多くありますし、私が白百合に来た頃に比べると学生の体力はかなり低下したと実感します。

そういう状況の中で、大学教育における体育の重要性が「心身相関」という観点から見直されるようになってきたのは、喜ばしいことです。体育はただ単に、体力の低下を防いだりストレスを解消するだけではなく、コミュニケーション能力、とっさの判断力など、社会性を育むことができる…ここに注目してもらいたいのです。

私自身は白百合での36年間、運動に対するハードルをできるだけ低くし、日常生活の中で運動することの楽しさを学生に伝えることを念頭に努力してきました。みんなに伝わったかどうかはわかりませんが、今後も伝え続けていきたいと思っています。

最後に、昨年体育館に長年の念願だった冷暖房設備がつきました。おかげで体育館がすごく快適な運動空間になりました。皆さんもぜひ体育館に足を伸ばしてみてください。

Message

文学部国語国文学科
教授　小林　明子

室城先生、ありがとうございました

先生には、私が本学に着任した時から、校務や学生指導等々、さまざまな場面でお世話になりました。『うつほ物語』の研究者として数々のご著書もお有りで、国語教育の面でも活躍されていた先生は、学内にとどまらず学外のお仕事にも精力的に関わってこられました。そうしたなかで、豊富な知見とご経験を踏まえ、課題を具体的に指摘してくださり、より良い方向へと導いてくださいました。

また、忙しい毎日を過ごされていらしたにも関わらず、そのようなご様子は少しもお見せにならず、資料箱や研究書が堆く積まれた個人研究室の奥で、黙々とお仕事をなさっていらしたお姿、一方で、国語国文学科研究室で学生と一緒に、時に笑い声をあげながら調べ物をなさっていたお姿は、まさに研究者として、大学教員としての真の姿そのものと思っております。

どうぞ、お身体を大切になさってください。そして、これからも宜しくお願いいたします。

Message

基礎教育センター
教授　佐々木　裕子

吉成先生、ありがとうございました

吉成先生とは奉職以来、基礎教育センター（当時は共通科目）のメンバーとしてご一緒させて頂きました。先生は長年、共通科目主任や基礎教育センター長をお務め下さり、楽しい時も非常に困難な課題に直面した時も、常に私たちを支え守って下さいました。本当に感謝の言葉もありません。また、学生・就職委員を長年お務めになり、白百合祭やプレイデーなどで常に学生たちと「共に在る」先生でした。何よりも驚いたのは学生一人ひとりの名前を見事に覚えていらしたことです。先生との出会いによって白百合の教育の本質である温かさに触れた学生や卒業生は少なくありません。また、「大学は女性が社会に出る前に運動や身体のことを学ぶ最後のチャンス」と、人生の基盤としての「教養としての体育」の大切さを常に語って下さいました。私も年々そのことを実感していますが、多くの卒業生や白百合生たちの中には先生の笑顔と共に、学生への思いが確実に蒔かれ、根づいています。長い間、本当に有り難うございました。そして、これからも宜しくお願い致します。

トピックス

ニューカレドニア大学（フランス）との協力に関する合意書締結

2024年1月に、ニューカレドニア大学（フランス）との協力に関する合意書を締結しました。ニューカレドニア大学は、1987年に設立された理工学部、法学部、人文科学部を擁する国立大学（学生数約3,500名）です。オセアニア地域およびニューカレドニアの環境やサステナビリティ、多文化共生、気候変動などの研究も行われています。

本学では、2023年度からニューカレドニア大学とのCOIL授業（オンラインで国内外のパートナー校と接続し、交流・協働を行う授業）を実施しています。合意書締結により、両校の関係を深め、教育、研究、その他の領域における学術的および文化的な交流を発展させることを目指します。

2024年度は、COIL授業の継続に加え、フランス語フランス文学科1年生全員がオンライン交流授業に参加しました。

また、本交流に関連するかたちで、フランス語フランス文学科2年生全員と学生有志によるニューカレドニアの中学・高校で日本語を学ぶ生徒約80名との文通プロジェクトも始まりました。日本語で届く手紙に、フランス語で返事を書くというもので、5月に早速手紙のやり取りがありました。

実用フランス語技能検定試験 文部科学大臣賞団体賞を受賞

本学は、実用フランス語技能検定試験（仏検）の2023年度「文部科学大臣賞団体賞」を受賞しました（公益財団法人フランス語教育振興協会（APFF）主催・文部科学省後援）。

仏検は英語における英検（実用英語技能検定）に相当し、フランス語の実用能力を客観的に測る検定試験です。この賞は、その年度における仏検出願者数と増加率および試験結果等を勘案し、年度を通したフランス語教育への取り組みを総合的に判断した上で、特に優秀と認められた団体に授与されます。

フランス語フランス文学科では、2023年度より、入学後にフランス語をはじめた全員が1年次秋に仏検4級を受験します。また、3級以上の級についても対策クラスを複数設置するなど、積極的な受験を後押ししています。

海外インターンシップエリアにマレーシアが加わりました

グローバルビジネスプログラム（GBP）では、海外の日系企業や現地企業でインターンシップを行う「海外企業実地研修」が2013年度から始まり、これまで多くの学生が現地で学びを深めてきました。このたび派遣先として新たにマレーシアが加わり、アメリカ（デンバー、サンディエゴ）、ニュージーランド、フィリピンの3カ国4地域から4カ国5地域へとさらに充実したものになりました。

マレーシアは異なる民族や宗教が共生して発展してきた多様性を持つ国です。首都クアラルンプールにある旅行会社でのインターンシップでは、スタッフの様々な背景を理解し、行動することが求められました。学生は日帰りツアープランの作成に挑戦し、優秀なツアープランが実際に商品化されました。

マナー・プロトコールの学びと検定受験が学内で可能になります

2024年度から、ホスピタリティ・マネジメントプログラムのオプション科目「ホスピタリティマネジメント特講A」で、マナーやプロトコール（国際儀礼）を学び、学内で「マナー・プロトコール検定試験（NPO法人日本マナー・プロトコール協会主催・文部科学省後援）」を受験できるようになりました。

同検定は、マナーやプロトコールに関わる知識と対応力を認定する文部科学省後援の資格で、国際ビジネス、サービス産業、教育業界をはじめ、ホテルや航空、ブライダル業界などで活躍する方に、上級資格取得者が多い資格として知られています。

高大連携協定を締結

本学は2024年2月22日に神田女学園中学校高等学校（東京都千代田区）と、3月6日に茗溪学園中学校高等学校（茨城県つくば市）と高大連携に関する協定を締結しました。

また、2024年3月7日には佼成学園女子中学高等学校（東京都世田谷区）と図書館利用に関する協定を締結しました。

今後、協定に基づき、交流や連携を深めていきます。

本館・体育館が改修されました

昨年度、大学では、本館の改修工事と体育館の空調設備の更新工事を行いました。長い工事期間中、足場に囲まれていた本館は、レンガ色の外壁が新築当時と同様に美しく再現され、屋上のモニュメント等も綺麗に磨かれました。また本館内の全てのトイレが改修され、衛生設備も使いやすくなりました。また体育館には、空調設備を設置しましたので、夏場にかけては涼しく快適に、冬場は暖かく使用することができます。体育館には、新しくなったシャワー室も完備されていますので、クラブ活動や体育の授業後にご利用いただけます。改装された本館・体育館の施設設備を学生・教職員の皆様に更に有効活用していただけたら嬉しいです。

学内でMOS試験が受験できるようになりました

MOSとは、WordやExcel、PowerPointなどのMicrosoft社のOffice製品の利用スキルを客観的に証明することのできる資格です。正式名称はマイクロソフト オフィス スペシャリストといいますが、一般的にMOSの略称で知られています。MOSの資格取得はPCスキルアップを目標として利用できるほか、インターンシップや就活の時のアピールにもなります。本学では、株式会社オデッセイコミュニケーションズとの契約により学内でMOS試験を実施できるようになりました。

2023年12月に第1回MOS学内試験（12月18日、22日、26日の3日間）が行われました。33名が受験し全員が合格しました。満点での合格者も2名おり、うち1名がMOS世界学生大会2024の日本代表に選出されました。

MOS世界学生大会2024の日本代表に選出されました！

MOS世界学生大会2024の日本代表に、文学部フランス語フランス文学科4年の菊川愛梨沙さんが選ばれました。

MOS世界学生大会は、高校生以上の学生を対象に「マイクロソフト オフィス スペシャリスト（MOS）」を通して、社会人として必要なアプリケーションスキルを身につけ、さらに卒業後には、国際的に活躍できる人材育成を目的として開催される世界規模の大会で、今年で22回目を迎えます。2024年は日本全国から延べ1万3千人を超える学生がエントリーし、日本代表に選ばれました。

2024年6月4日に「MOS／アドビ認定プロフェッショナル世界学生大会2024」日本代表＆入賞者発表会が東京會舘で行われました。日本代表発表セレモニーで、株式会社オデッセイコミュニケーションズの出張勝也代表取締役社長より「世界大会出場権利」として日本代表の表彰状が授与され、菊川さんの日本代表の決意表明挨拶が行われました。

菊川さんはこの夏、日本を代表して米国アナハイムで行われる決勝戦で、世界各国から選出された代表者と共にExcelの試験を受け、世界チャンピオンを目指します。

2023年度「学生活動に関する顕彰制度」学生活動奨励賞

2024年1月29日、2023年度学生活動に関する顕彰制度の表彰式が行われました。本制度は、本学の学生または本学学生で組織する団体が、その活動分野において他の模範となる成績を収め、または貢献した場合、それが学生や団体並びに本学の栄誉となるものについて顕彰する制度で、学長賞と学生活動奨励賞の二つがあります。2023年度は学生・就職委員会での書類審査、対象者へのヒアリングなどを経て、以下2件の学生活動奨励賞授与が決定しました。

○硬式庭球部

「2022年度第20回カトリック女子大学総合スポーツ競技大会にて硬式テニスの部優勝」

2020年度、コロナ禍で活動制限がある中、部員2名から徐々に活動を再開。学業との両立を掲げ、先輩後輩対等にコミュニケーションをとることで部員数を増やしていき、2022年12月、3年ぶりに開催されたカトリック女子大学総合スポーツ競技大会にて、2015年創部以来初の優勝を果たした。

コロナ禍の困難を乗り越えて勝ち取った好成績、制限のある中でも活動を続けた継続性・団結力を評価し、今後も本学クラブ活動の模範となり、活性化への役割を期待して授与。

○村上紗弥花（人間総合学部 発達心理学科4年（受賞当時3年））

「調布まち活フェスタ実行委員としての3年にわたる活動とその他ボランティア活動への取組」

高校時代からボランティアに参加し、大学入学後は、自身が学ぶ領域（心理学）で様々な年代と接することがプラスになるという向上心から、1年次より調布まち活フェスタ実行委員会に参加。学生が自身1人だけという状況が続くなか継続し、2年次には副委員長、その後実行委員長として2024年3月のまち活フェスタ開催に向けて中心になって活動。そこで得た信頼から、ちょうふチャリティーウィークの広報部長、調布市子ども・子育て会議及び調布市次世代育成支援協議会委員、緑ヶ丘児童館でのボランティアと活動の幅を広げた。学内では白百合祭実行委員ヘッドとしての要職も担う。

一人での参加を決断した行動力・向上心、3年続けた継続性を評価し、この経験を活かして、今後の更なる社会での活躍に期待して授与。

CG-ARTS賞受賞

文学部国語国文学科4年の小島結衣さんがCG-ARTS賞を受賞しました。

この賞は、公益財団法人情報教育振興協会の教育認定校において、CG-ARTS検定合格者やWeb関連カリキュラムにおいて学業優秀な学生に贈呈されます。小島さんはWebサイトのコンセプトメイキングからWeb制作、運用に関する専門的な理解とWebサイトのデザインに関する応用力を測る試験である「Web デザイナー検定」のベーシック試験とエキスパート試験の両方に優秀な成績で合格したことが評価されました。

キャリア・その他

2024年3月卒業生の就職環境とキャリア支援

2023年度卒業生の就職率については、下記の結果となりました。

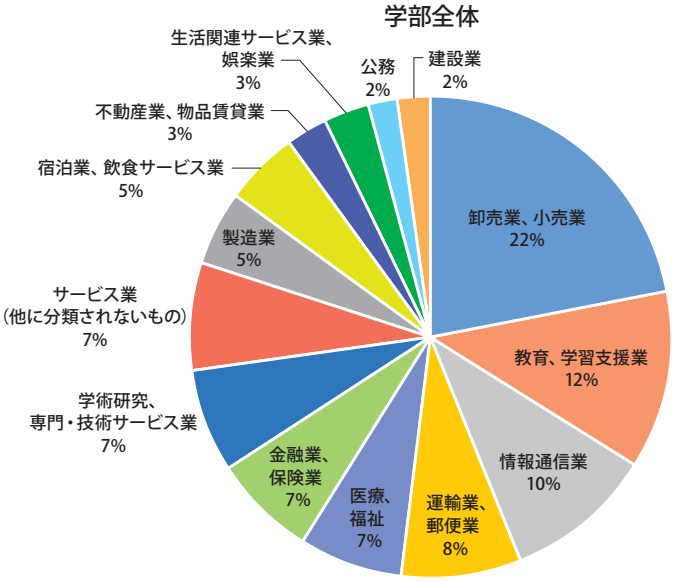
学部全体	国文	フ文	英文	児文	発達	初等
98.8%	97.7%	100%	99.0%	97.7%	97.1%	100%

キャリア支援課進路決定時アンケートによるとキャリア支援課を利用した学生は84%、決定先進路の満足度は95%、キャリア支援課の満足度は96%となっています。キャリア支援課で実施する「面接対策講座、集団面接練習」などのセミナー、対面とオンラインのいずれにも対応した「個別面談」などを使って活動を進めていくことが、満足度の高い就職活動につながっています。

就職先の業界別割合については右記の通りです。多種多様な進路となっていることがわかります。（学部全体）

キャリア支援課では、様々な業界で活躍するOGをお招きしてガイダンスでご講演いただくほか、企業の人事担当者による「業界セミナー」なども実施しています。色々な業界や企業のお話を聞くことで、業界の理解だけでなく視野を広げることなどを目指しています。

キャリア支援課では「一番身近なサポーター」として一人ひとりに寄り添った支援をしていきますので、積極的に利用してください。



ルイ・ショーヴェセンター

4月より3号館1階にルイ・ショーヴェセンターが開室されました。このセンターの由来となったルイ・ショーヴェ神父（1664-1710年）は白百合の設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会を創立したカトリックの司祭で、今から約330年前、フランスのシャルトル近郊のルヴェヴィル・ラシュナール村で村人と共に学校を作る活動を始めました。それは単に読み書きの教育ではなく、現代でいうSDGsのような「社会課題」――貧困や飢えからの解放、教育や健康、福祉、人権等――を包摂した、地域の人々と共に在る教育でした。教師や生徒は勉強が終わると皆でスープを作って病人や苦しむ人々を訪問したことが知られていますが、それと共に、どのような厳しい社会環境下にあっても人間の生きる意味や尊厳、理想を信じ、それを生きる教育が目指されたのです。

本センターはこのショーヴェ神父の理念の周知と実現を目的に設置されました。学園に関わる資料アーカイブの整備をはじめ、すでにセンターに集まっていた学生たちが「Sourire（スーリール）（フランス語：笑顔）」という団体を立ち上げ、主体的にボランティア活動を始めています。学生、教職員、卒業生の皆さま、どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。

開室時間は原則として月曜～水曜の9時～17時、及び木曜・金曜のお昼休みとなっていますが、行事などによる変更もありますのでインスタグラム等で確認して下さい。

▶インスタグラム QRコード

学生生活満足度調査報告書（2023年度）

本学では、学生生活全般の満足度を調査し今後の改善に役立てるため、2年ごとに「学生生活満足度調査」を実施しています。前回の2021年度調査で学生から意見・要望の寄せられた体育館の空調設備については、2023年度に工事を行いエアコンの設置や更衣室のリフォームを行いました。またWi-Fiエリアの拡張や、図書館で扱う本のジャンルや冊数に関しても改善を図りました。

今回2023年度の調査では、電子決済導入、学生が自由に利用できるパソコンの増設、その他貴重な意見をいただきましたので、現在進められる所から改善に向け進めています。

2023年11月～12月に実施した「2023年度学生生活満足度調査」の結果はHPに公開しました。自由回答欄で寄せられた意見・要望について、現時点での対応状況についても公開しています。詳細はHPをご覧ください。

▶学生生活満足度調査報告書

編集・発行
白百合女子大学
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘1-25
TEL:03-3326-5050（代表）　FAX:03-3326-4550
https://www.shirayuri.ac.jp/